

小学校中学年の部 特選

「子ぎつねヘレンがぼくにのこしたもの」

吹田市立片山小4年 脇田悠生さん

この本を読んだとき、ヘレンから何か重たいものが飛びこんできたように感じた。それが何なのか、ぼくは、ヘレンの気持ちに近づけたらわかるかもしれないと思って、包帯で目をかくして耳せんをしてみた。時間がとても長く感じられた。何も見えず、音もないヘレンのいた世界は、ぼくが想像していたよりもずっと怖くて、ひとりぼっちでさみしかった。ヘレンは、少しも油だんができなくて、ずっと緊張していたにちがいない。ヘレンは、何のために生きていたのだろうか。自然の中では生きていけなかった命、「命ってなんだろう」と、ぼくは、考えるようになった。

ぼくは、もやもやして何度も読み返した。すると、いつも同じ場面で感動していることに気がついた。それは、ヘレンがふる里の砂丘で一步一步ふみだしていくところだ。ぼくは、「すごいぞ、ヘレン!」と心の中でさけんでいた。ヘレンが知らない場所で前へ進むのは、とても勇気がいるはずだからだ。ぼくは、このとき、ヘレンの「生きよう」という強い意志を感じていた。ぼくの体にも思わず力が入っていた。いつの間にか、ぼくの中にヘレンの気持ちが投げこまれて、心の中でヘレンと一緒に生きることができていたのだと気がついた。

きっと、ヘレンとくらしていた竹田津さん夫婦は、もっとたくさんのヘレンの気持ちを感じて、自分たちも同じ気持ちになりながら一緒に生きていたのだと思う。ヘレンは、一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれる相手の顔を見ることも、声を聞くこともできなかったけれど、気持ちをわかりあえる竹田津さん夫婦と出会うことができて、ひとりぼっちではなくなっていたのだ。だから、はじめはヘレンのことが不幸に思えたけれど、最後は、ヘレンが生きることを楽しめるようになっていたのだと思う。

ヘレン、ぼくは、わかったような気がするよ。いままでのぼくは、命とは生き物の心ざうが動いている、死ぬまでのことだと考えていた。でも今はちがう。ヘレンから感じた命は、そんなかんたんなものではなかった。命とは、気持ちをわかりあえる相手の心の中にも生きていて、一緒に生きている人と切りはなして考えられないものなのだ。ぼくの中に飛びこんできたのは、ヘレンの怖さ、さみしさ、喜び—ヘレンの命の重みそのものだったのだとわかった。

ヘレンは、重い障害があつてすぐに死んでしまったけれども、その命は、こんなにもぼくの心を動かすすごい力をもっていた。ぼくにもヘレンと竹田津さん夫婦のように、一緒に喜んだり悲しんだりしてくれる家族や友達がいる。自分の命が相手の心を動かしていると知ったからには、ヘレンのように勇気のいることにもふみ出して、ぼくのためだけではなく、家族や友達にも喜びや勇気、力をあげられるように生きていきたい。ヘレンは、ぼくにそういう生き方を教えてくれた。（「子ぎつねヘレンがのこしたもの」 竹田津実／偕成社）